

岡田式浄化療法の施術力の開発

－統合的意識拡張と人類の意識進化－

的場 主真¹

抄 録

岡田式浄化療法（OPT）を含むエネルギー療法においては、理論を学習し実践を積むことによって、施術能力を高めることができるが、最も重要なことは、霊性を向上させることであり、科学的に言い換えれば、「統合的意識拡張」が必要である。本論では、ホイザーと的場の2つの先行研究で得られた知見に基づいて、この統合的意識拡張がさらに、人間の発達と人類の進化の交錯する「型」という概念と密接に関連しており、岡田茂吉思想の中核をなす理論であることを解説する。また、この革新的な思想が、実は現代心理学や進化論における斬新的な理論を先取りする形で、すでに20世紀初頭に発表されており、今後の自然科学と宗教の対話に貢献することも示唆している。3か年継続研究の最終年度の本論文では、以上の考察を盛り込んだ、大学医学部における霊性向上のためのカリキュラムの試論を提案する。

キーワード

霊性向上、人間の発達、夜昼転換、型

1. 研究の背景

岡田式浄化療法の施術資格を得るためには、浄化療法の基本的理論（宇宙、自然、人間、浄化原理）と浄化療法の施術方法（探査、施術）を学んだ上で施術力を高める要素として「人格・霊性」の向上が求められる。2012年以降の3年間の継続研究『医師および療法士の霊性向上と養成の課題』の目的は、岡田式浄化療法を中心とする「新しい医学」の施術力強化の鍵を握っている霊性の向上の概念を、さまざまな科学分野の見地から考察し、宗教的用語を使用することなく科学的語彙に翻訳し、大学医学部における岡田式浄化療法講座の中で使用可能なカリキュラムを提案すること

である。

2012年度研究「人智学医学と岡田式浄化療法における霊性向上に関するウィルバーの統合理論による比較研究」¹⁾では、両者の霊性向上に対する考えは非常に類似しており、霊と霊界の認識が霊性の向上であり、ウィルバーの統合理論を枠組みとして「統合的意識拡張」という概念を構築し、「霊性の向上」の翻訳語として提案した。2014年度研究「複合コミュニケーションとしてのエネルギー療法」²⁾では、施術能力の開発に必要な統合的意識拡張が、広義のコミュニケーション能力の開発と関連していることに注目し、コミュニケーションにおいて生体エネルギー放射を体験し、傾聴能力を高め、『非局在情報・エネルギー』に同調することが、施術能力を高めることにつながることを解説した。

2015年度研究は最終年の研究であり、岡田茂吉思想では、個人の発達と文明の進化の関連性が強調されて説かれていることに注目する。この関連性の指摘は、個体発生と系統進化の類似性を指摘した反復説を生物学や心理学に応用している理論に先駆けるものであり、

¹ ヴィッテン・ヘルデッケ大学文化学部
〒D-58452 ドイツ国ヴィッテン市アルフレート・
ヘルハウゼン通り50

連絡先：

的場主真. TEL: (+49) 2303-9206520,

E-mail: kazuma.matoba@uni-wh.de

受付日：2017年7月28日，受理日：2017年12月9日。

岡田茂吉思想の核心的な理論が人類・文明の進化に関する「夜昼転換」論であることを解説する。また、統合的意識拡張をこの岡田の進化論の中に明確に位置づけることにより、統合的意識拡張の深い意味が理解される。このことは、岡田茂吉が、岡田式浄化療法の病気が治ることが目的ではなく、「もっと大きな意味」があり、「幸福を生む方法である」³⁾と述べていることと関係がある。

エネルギー療法としての岡田式浄化療法の、単に生体エネルギーを応用し、施術者が非施術者の患部に放射する治療法ではなく、人間は物質としての体のみではなく霊的な存在として捉え、さらに病気を浄化作用として捉える「新しい医学」理論に裏付けされている。その施術能力を高めるためには、その深遠な理論を理解した上で、霊性向上、すなわち統合的意識拡張に努めなければならない。以下の第2章では、2012年度¹⁾と2014年度²⁾の研究を要約し、統合的意識拡張に必要な能力と複合コミュニケーションをウィルバーの4象限に分類する。そして、統合的意識拡張が、個人の発達プロセスの時間軸に沿った個体の変化であり、人類の進化プロセスの時間軸に沿った集団の変化との関連に注目している岡田茂吉の理論を、ウィルバーやグレースの理論と比較しつつ紹介する。さらに、第3章では、大学医学部における霊性向上のためのカリキュラム試案の骨子を提案する。

2. 統合的意識拡張と人類の意識進化

ホイザーと的場¹⁾では、岡田の霊性向上に必要な項目をウィルバーの4象限「私」(第1象限)、「私たち」(第2象限)、「それ」(第3象限)、「それら」(第4象限)に分類して考察すると、「自己意識」、「自他関係」、「自然宇宙観」、「人間と環境(不可視の世界も含む)のシステム観」を統合的に開発することが霊性の向上であることが理解され、「霊性の向上」とは統合的な意識の拡張であることを解説した。さらに、的場²⁾では、意識と非言語的精神活動をも含む広義のコミュニケーションとの関係についても言及し、コミュニケーションが意識を形成し、さらに社会的現実を構築するという社会構成主義の立場から見れば、霊性向上としての「統合的意識拡張」とは、コミュニケーション能力の開発であることに言及している。

表1は、以上の研究成果と的場²⁾における複合コミュニケーション(「社会的感化コミュニケーション」、「非言語ホリスティック心身コミュニケーション」、「直接コミュニケーション」)との関連を示したものである。左欄には霊的向上、すなわち統合的意識拡張の下位分類を羅列し、中央欄ではこれらの分類に岡田茂吉の挙げた必要項目を対応させ、右欄では、統合的意識拡張が複合コミュニケーションにおける重要な機能である「生体エネルギー放射」、「傾聴」、「非局在情

表1 統合意識拡張に必要な項目(能力)と複合コミュニケーションとしてのエネルギー療法

統合的意識拡張		岡田茂吉の挙げる必要項目	複合コミュニケーション
自然宇宙観	人間の構成	•人間は肉体ー精霊ー心ー魂から構成される。 •霊医学的知識(病気は霊作用と浄化作用、罪けがれと病気の関係、自然治癒力)を深める •心臓、肺臓、胃の霊的機能を理解する •真の養生法 •霊線について理解する	客観的自己コミュニケーション 生体エネルギーが存在し、 肉体より放射されていること の認識
	自然界の構成	•霊界の構成に対する知識を得る •霊界と現界の関係を知る •火素・水素・土素の存在を認識する •自然力を体得する •植物にも魂がある事を体得する •大三災(風水火)と小三災(飢病戦)の原因は浄化作用である事を知る	
	宇宙の構成	•太陽、月、地球の霊的意味を知る	

統合的意識拡張		岡田茂吉の挙げる必要項目	複合コミュニケーション	
自己意識	自己（人間）の本質	• 霊波と霊衣の存在を知り、霊衣を厚くする • 『霊体一致』、『霊主体従』の法則を体得する • 本守護霊、正守護霊、副守護霊の存在とそれらの役割を知る • 憑依霊に対する知識を得る • 人間の使命を知る	主観的自己コミュニケーション	社会的感化コミュニケーション 利他愛と誠を実践することにより、生体エネルギー放射を強化する。
	自己（人間）の存在世界	• 霊層界と人間の運命の関連を知る • 輪廻転生の知識を得る • 霊籍の向上が幸福につながる事を理解する		
	自己の感情・思考・言動	• 自分の悪に勝つ • 人間は想念次第である事を知る • 道理に従う • 正直で嘘をつかない • 言語行動が常識に外れないようにする • 我を去り、執着を取り、お任せする • 善徳を積む • 『伊都能売の身魂』（偏らない主義）を理解する（程を知る） • 大乘的見方（大局的見地）をする • 刹那の我になって直感的に物そのものの実体を把握する • 客観的に自分を観察する • 常に進歩向上を心がける • 宿命と運命の違いを知る • 社会悪に勝つ • 正義感を持つ • 懐疑を抱く • 高い芸術に触れる		
自他関係	自己と他者の関係	• 利他愛を実践する • 誠をもって行動する • 人から信用される • 感じの良い人になる • 怒りを克服する • 優しさと奥床しさを身につける • 人を裁かない • 憎まれないようにする • 正愛と邪愛を区別する • 日と月の意味を知る • 話す場合、先方が理解し、興味が湧き、快く聞くというようにする • 自然良能力（自然治癒力）を尊重する • 人間力を抜く程施術力が高まることを知る	対人コミュニケーション	非言語ホリスティック心身コミュニケーション 利他愛と誠を実践し、傾聴能力を高めることにより、生体エネルギー放射の治癒力を高める。
	自己と世界の関係	• 世界人となる • 人間はもとより鳥獣虫魚草木の末に到るまで親しみを感じるようにする		
人間と環境のシステム観	組織・社会システム	• 政治・経営を『主』の形にする • 道理に従う道治国をつくる	システムコミュニケーション	直接コミュニケーション 人間、自然・宇宙をつなぐエネルギーの存在を意識し、非局在情報への同調能力を高める。
	生態システム	• 大自然の順序を重んじる • 『調和の理論』を理解する		
	時間システム	• 時を重んじる • 『夜昼転換』について知る • 『経緯』の意味を知る • 『破壊と建設』の経綸を理解する		
	霊的因果システム	• 輪廻転生について理解する		

報への同調」能力の開発につながり、エネルギー療法の施術力の強化と関連していることを要約したものである。

意識の拡張とは、人間の生涯の心的、身体的、社会的発達の過程を記述する心理学で取り扱われる意識の発達のことである。幼児の認識の発達段階を研究したジャン・ピアジェは発生的認識論の基礎を築き、後続する多数の心理学者が発達心理学という分野を確立し現在に及んでいる⁴⁾。初期の発達心理学者達の中には、生物個体としての人の認識発達段階の研究と、生物種としての人の認知の変化を進化とみなし通時的に研究する進化論的認識論との間に関連性があるという仮説を立てる学者もいた⁵⁾。

本章では人の「個人の発達」と「種の進化」の関連性について立てられた仮説理論、反復説を再検討し、ウィルバーやグレイブスの意識進化理論に与えた影響を考察し、さらに、岡田茂吉における人間の発達理論と文明の進化理論もある種の反復説であることを解説する。

2-1 生物学における反復説

生物学では反復説という、生態系全体の進化が、個体の成長変化として反復していることを主張する仮説理論がある。初期の反復説は19世紀前半にエチンヌ・セールとエルンスト・ヘッケルが、脊椎動物の個体発生過程が、魚、両生類、爬虫類、哺乳類の順を経て形態の進化のプロセスをなぞることを観察し反復説を提唱する⁶⁾。この説は多くの学者から批判を受けるが、完全に否定されてはなく、現在も多くの生物学者や心理学者の興味を引いている。これまでのさまざまな反復説を要約すると、3つの反復が観察されている。

(1) 身体進化の反復

ヘッケルが指摘した反復で、妊娠8週までに見られる進化の反復。胚発生のプロセスにおいて、胎児の体ができ上がる過程で、人は、形態的に単細胞生物から魚類、そして人への進化を追体験する。例えば、人でも、魚類の段階では鰓弓という鰓(エラ)を支える構造が現れる。また、手足も、魚のヒレ→両生類の水かきのある手足→人の手足の段階が見られる。

(2) 運動進化の反復

妊娠9週～誕生の段階では排泄機能など内臓の運動や、四肢の運動が始まり、この過程で見られる反復過程。胎児になりたての段階では、ほとんど筋肉と基礎運動の発達を通して、軟体動物の原始的運動から人の複雑な運動への進化を追体験する。最終段階では、新生児微笑と呼ばれる、感情表現を可能とする表情筋の運動が可能になるが、表情筋の運動は哺乳類の段階まで進化した動物で、初めて見られる運動である。

(3) 行動進化の反復

出産後、立ち上がり、言葉を話すまでの段階で見られる進化のプロセス。子宮という海から、出産して地上に姿を現した新生児は、魚が手足を伸ばし、四足動物の過程を経て、二本足で立ち上がり、言葉を話すまでの過程をなぞる。

以上の3種類の反復説は、身体の変化に関する反復であるが、生態系全体の進化が、文明の発展や個人の成長、精神構造の変化として反復し現在に畳み込まれていることを主張する学者もいる⁷⁾。この説は「意識進化の反復説」と呼ぶことができるであろう。一般の進化の反復性は、身体のさまざまな発達段階に注目しているが、身体の変化は必然的に認識にも影響を与える。この認識の発達と自我形成が相互に関係性があることは、ピアジェ以来の発達心理学で実証的に指摘されている。

人類が地球上に誕生して現在に至る長い年月の間に、身体が変化し、認識にも変化をもたらし、自我意識が進化してきたことは最近の進化心理学の研究で解明されつつあるが、この長期にわたる進化が、個人の成長発達にも反復することを仮説として1959年に発表したのが心理学者のクレア・グレイブスである⁸⁾。

このような「意識進化の反復説」は、科学、特に心理学と生物学だけの仮説ではなく、神秘主義や宗教の文脈の中にも見出すことができる発想である。生物種(人類)の意識進化がなぜ個体(個人)で繰り返されるのか、という質問に対して科学は十分に興味を示しておらず、また答えることもできない。しかし、神秘主義や宗教では、この質問に対して、神秘的、道徳的意味を付加して答えようとしている傾向がある。この傾向が故に、科学は神秘主義・宗教との対話を避けてきたことは否定できない。

以下の章では、この「意識進化の反復説」を取り入れたウィルバーの進化観とグレーブスの発達理論を発展させたスパイラルダイナミック理論について簡単に触れ、さらに、岡田茂吉が時代を先取りして、「意識進化の反復説」を「夜昼転換」という理論の根本に取り入れていたことを明らかにする。

2-2 ウィルバー統合理論における進化の問題

ウィルバー⁹⁾によると、人類の進化とは「個」の進化と「集団」の進化がお互いに関連し合いながら展開する過程である。人間が個人として発展しようと努力するとき、必然的に共同体の発展に寄与していることになる。つまり、個の発達と集団の発達は相補的な関係にあり、人類の進化に貢献している。彼の統合理論では「霊」の存在を認めた上で、「個」の進化と「集団」の進化が霊の顕現として展開する。つまり、人間の本質である「霊」は、個人とだけに関わっているのではなく、集団とも関連しており、個人と集団の両者に規定され、そして両者を規定している。個人はこの霊とのつながりを認識することにより、集団への影響を行使し、集団からの影響を感知することができるのである。この考えは華嚴経にある帝釈網（インドラネット）の影響を受けていると言えるだろう。須弥山に住む帝釈天が地球中に張り巡らした網には、結び目の一つ一つに宝石が編み込まれており、一つの宝石に映し出された事象はすべての宝石に映し出されるという逸話から、このような世界観を華嚴経では「一即多、多即一」と表現し、ひとつは全体であり、全体は一つであると説いている。

このウィルバーの進化観は、心理学者クレア・グレーブスの意識進化理論⁸⁾を基に弟子のエドワード・ベックとクリストファー・コーワンが発展させた『スパイラルダイナミック理論』を取り入れることにより、より汎用性の高い説得力のある理論となり、多くの賛同者を得ることになる。『スパイラルダイナミック理論』¹⁰⁾は、グレーブスが収集した膨大な統計的調査に基づいて構築された、個人の発達と人類の進化の関連性についての理論であり、さまざまな世界観、アイデンティティや意識のあり方を、個人の発達段階と集団（人類全体）の進化の段階の双方において分類したも

のである。以下の表はベックとコーワン¹⁰⁾における発達段階を要約したものである。個人の発達時間軸も集団の進化時間軸もその共通性から8つのレベルに分類され、それぞれのレベルの意識の特徴が抽象的に記述されている。例えば、第1レベルの新生児の段階は、約紀元前10万年前から紀元前5万年の間の時代の人類進化に類似しており、両者の共通性は生き残ることが最重要課題であり、直感的に行動していることである。

ウィルバーの進化観もスパイラルダイナミック理論も、その前提となる見解は「意識（あるいはものごとすべて）には階層（レベル）があり、成長・発展により下から上へと、浅いところから深いところへと、後者が前者を『越えて含む』というステップを踏み、深化・上昇していく」¹¹⁾という考え方である。これは一見特殊な見解であるように見えて実は普遍的な見方であることが、多くの哲学や心理学の理論を参照すれば確認できる。ピアジェやコールバーグ、マズローといった心理学者たちの発達モデルにも、容易に階層の特徴を見て取ることができる。

2-3 岡田茂吉における進化の問題：魂の向上と文明の進化

ウィルバーは、人間の発達を意識の階層的発達と看做しており、しかもその発達プロセスは人類全体の進化の反復である仮説を立てたが、岡田茂吉も人間の発達と文明の進化について形而上的考察を展開している。人間の発達に関しては、人間の本質である魂の観点から「魂の向上」として捉え、文明の進化に関しては、宇宙天体のリズムとの関係において「浄化作用」としての「破壊と建設」が繰り返され、現在は「夜昼転換」の時期であると説いている。次章では、この非常に透察深い岡田の理論を詳説し、霊性向上、統合的意識拡張との関連を探る。

2-3-1 人間の発達論：『魂の向上』

19世紀、医学や生理学的研究の進展から、心理学は魂の科学から心の科学へ変容した。それ以前は、キリスト教の影響下で、人間は神によって与えられた不滅の霊魂を持つという考えが完全に支配されていた。その時代にエラズマス・ダーウィンが現れ、心の働きを

表2 スパイラルダイナミック理論における発達と進化の8レベル (著者改変)

レベル	個人の発達時間軸 (個体発達)	集団の進化時間軸 (人類進化)	個体発達と 人類進化に共通する 意識の特徴	具体的記述
1	新生児	約紀元前10万年以降	生き残り、直感的	もっとも根源的な欲求である「生き残るため」や「本能が原動力になっている行動」が、成長段階の第一ステージ。
2	乳児から3歳頃まで	約紀元前5万年以降	集団的秩序、部族の規律、	生き残りのステージを越えると次は「集団的秩序」を意識し始める。自己の生存が確保できたために、自分も含めた集団の秩序に意識が向き、秩序によって集団生活を維持することができるようになる。
3	3-4歳頃	約紀元前7千年以降	権力、神の力	集団的な秩序を形成できれば、次は「権力」への意識が高まる。集団を統治し、その秩序を維持するための力を保持したいという欲求が起こる。
4	思春期頃まで	約紀元前3千年以降	秩序と絶対者	全体の「秩序」への意識と「自己重要感」が高まり、絶対者として自分を特別視することが、そのまま秩序を安定させる欲求にもつながる。
5	青年期から18-25歳頃まで	1700年頃以降	努力、成功	「努力家」や「成功者」が到達するレベル。絶対者としての自己イメージを越えて、さらに成長しようとする欲求が高まり、継続的な努力が成功者を生み出す。
6	成人から中年期	1850年頃以降	社交性意識	自分の成長を超えた先にあるのは、社交性を重視する姿勢で、このレベルからは、周囲への愛や貢献も意識するようになる。
7	約40歳以上	1950年頃以降	包括的、臨機応変	「包括的」な視野の広がりや「臨機応変」な態度が身につく、個人と全体を超越したカリスマのような存在。
8		1970年頃以降	目覚めた魂	最後に到達するレベルが「目覚めた魂」。指導者や神のような心理状態。

体中に張り巡らされた神経と、その内部を流れるエーテルによると主張したが、この考えは靈魂が肉体外に存在するのではなく、体中に分散するものであるというもので、キリスト教的な考えからは到底受け入れがたいもので、公的には無視された。その後も魂の信奉者たちは、神に魂を与えられたという人間観を護ろうとし、物質的な過程とは独立に存在する心的過程の存在を主張し、その在り処を脳の意識的なプロセスに求めることになったが、フロイトによって無意識の存在が再確認され、無意識的な過程をいかに理論に取り組むかという研究が盛んに行われることになり、心理学が実証的な科学へと確立していく。しかしながら、実証的研究は、要素還元主義的な方向をたどり、神経生理的過程と心（マインド）の相関関係を追求する、心のメカニズムの科学へと変容していった。このような

心理学の発展のプロセスにおいて、魂という概念は心理学、科学の枠組みの外へと追いやられてしまう。

その中で、カール・グスタフ・ユング（1875-1961）は、精神内界に自律的に生起するイメージ（表象）を重視する分析心理学を構想する。彼は、フロイトが個人的な情動や記憶が抑圧される領域と考えた無意識を、人類全体に共有される元型が創造される集合的無意識として再定義する。この元型は世界各地に散らばっている神話・伝説・説話に共通するモチーフや物語性を抽出し、概念化することによって得られるものであり、元型の中心には、人類一般が生得的に持つ普遍的無意識のイメージとしての魂の存在がある。ユングは、魂は普遍的無意識の直接の顕現であり、人間が観察して操作できる対象（客体）と見なすと同時に、人間を観察して影響を及ぼしてくる環境（主体）

であり、魂そのものが主体的な意志や認識を持つ主体でもあると考える。

このようにユング派心理学では魂は研究の中心的対象であり、彼の弟子のギーゲリッヒやヒルマンは、人間の精神活動と切り離された外部にある魂の存在を前提として理論を構築しており、宗教と心理学との対話の可能性を探っている。

宗教に関する論文の中で岡田茂吉は、魂の本質について言及している。岡田によると、人間は「体」と「霊」の二要素から成り、「霊」は「精霊」と「心」と「魂」に区別され、「魂」が最も中央に位置する。ゆえに、「魂」が最重要な機能を果たしているのであろう。人間の向上とは、魂の向上であり、魂の位置に依存しており、人間は「神と獣の間」に位置する。

神は人間に対し無限の自由を与えている、これが真理である、人間以外の動植物には自由は与えられていない、ここに人間の尊さがある。しからば人間の自由とは何であるかという、人間向上すれば神となり、堕落すれば獣となるという両極端のその中間の位置に存在しているのが人間である。¹²⁾

向上－堕落、神－獣という二項対立を含む「魂の位置」という考え方は、善悪を明瞭に区別する二元論的構造を取っており、ゾロアスター教やユダヤ教、キリスト教など宗教教義の神と悪魔の概念につながる構造である。ユングも人間の精神活動の原初形態と見られる元型は『善悪・美醜の二元論的構造』を持っていると考えることと通じる。

的場とホイザー¹³⁾では、岡田の魂に関する考えを紹介し、「魂」には「現魂」と「幽魂」の二種類があり、これらは「霊線」で結びついていることを指摘した。現魂は心の内部に存在し、「幽魂」は「霊層界」180段階のいずれかに存在すると岡田は説いているが¹⁴⁾、ユング心理学的に解釈すれば、「幽魂」とは普遍的無意識のことを宗教的に表現したものであろう。幽魂あるいは普遍的無意識の起源は自然科学的に考えれば、思考・想像・創造の精神機能を生み出す大脳新皮質にあるといえる。しかし、岡田は幽魂の体内での位置に関しては言及していないが、現魂は「人間霊体

の中腑に在る」¹⁵⁾と解説しつつ、腹部の肚（ハラ）と、理性を掌る前頭部と、感情を掌る後頭部の3つが一体的に総合されたものが、人体の中腑であるとしている¹⁶⁾。岡田の論文に基づき検討すると、現魂は、腹部（肚）と前頭部（大脳新皮質）と後頭部（大脳辺縁系と脳幹）にまたがって存在し、ある一箇所に局在するのではなく、分散していると考えられる。腹部あるいは肝とは、東洋医学における丹田、あるいはヒンドゥー教タントラ生理学のマニプラ・チャクラに相当するものであろう。この部位は臍から5センチメートル下方で、背骨に向かい5センチメートルの体内に存在すると言われているが、解剖学的には該当器官は存在せず、小腸がある位置である。しかし、ここでは神経伝達物質（ホルモン）の腸内セロトニンが分泌され、幸福感と深く関係している脳内セロトニンを補助する機能が最近の研究で明らかにされつつある¹⁷⁾。前頭部（大脳新皮質）は合理的で分析的な思考や言語機能を司り、後頭部（大脳辺縁系と脳幹）は生命維持や本能行動と情動行動に関与している。このように「現魂」が存在すると想定される体内部位は、基本的な人間行動を統制する神経回路があるところである。それでは、「幽魂」とは、実体があり、その位置を確定できるものなのか、という疑問が残されているが、現在の自然科学のレベルではこの質問に答えることはできないだろう。上述したように、「現魂」は「幽魂」と「霊線」でつながっており、神の意図が「幽魂」を通して「現魂」に伝達されると解説しているが¹⁴⁾、このように自己の意思に反して、受動的に考えが思いついたり、行為がなされる場合を、一般に靈感（インスピレーション）や直観と呼ぶが、後者は哲学や心理学でも扱われている。一般的に、直観は第六感として理解されており、人間の心的内部での無意識の過程で無意識の信号が十分に強くなれば、意識として経験される。しかし、この無意識の信号がどこから伝達されるかは心理学では議論されないが、ユングは個人の領域を包み込んだ神・魂の超越的な力のようなものを想定していたのではないと思われる。また、岡田はその超越的な力を感知することができたのであろう。

2-3-2 文明の進化論：『夜昼転換』

以上では岡田茂吉の人間の発達論、すなわち個の発達に関する考え方と心理学や自然科学との関わりで考察してきたが、本章では文明の進化論、すなわち個人の集合体としての集団の進化に関する論考に焦点を当てる。

岡田によると、人間の魂が獣と神の間を発達していくように、文明も野蛮時代から「平和境」に進む¹⁸⁾。

世界は無限に進歩しているというのが真理で、これは何人も否定出来ない厳然たる事実であるからである。としたらいかなる理由があっても、再び野蛮時代に還元するはずはあり得ないのである。このように文明は進みに進んで、結局人類から野蛮性は完全に払拭（ふっしょく）されてしまうであろうし、そうなってこそ真の文明のあり方であり、ここに到って人類は平和境に安住し、幸福を楽しむようになるのである。¹⁸⁾

さらに、文明の進化の仕方には、ある宇宙自然の原理が働いていることを指摘し、『夜昼転換』という思想のもとに、夜と昼、陰と陽、破壊と創造、という二項対立概念を使って説明している。

本来天地間あらゆる森羅万象は、さきに説いたごとく、霊界と現界との両面の活動によって生成し化育し、破壊し創造しつつ、限りなき発展を遂げつつあるのであるが、これを大観すれば無限大なる宇宙であると共に、無限微の集合体である所の物質界でもある。それが極まりなき転変によって、停止する所なき文化の進歩発展がある。¹⁹⁾

さらに、この原理に基づいた進歩発展のリズムが個人の発達にも見られることを指摘している²⁰⁾。このように、夜昼の自然のリズムが人生を含むあらゆる事象に見出されることが明確に述べられているが、これは前述した生物学とクレア・グレイプスの心理学における反復説と類似する考え方である。

さらに具体的に、現在は「昼夜の切り替え時」であり、昼に転換する黎明期に相当し、これまでの「夜の世界」は水素が多く、今後の「昼の世界」では火素が漸次増量するとも述べているが¹⁹⁾、これらに土素を

加えた三元素は宇宙と人間を構成する基本元素であり、水素は月から、火素は太陽から、そして土素は地球から放射される、と説いている。（的場とホイザー（2014）の表1 「火素・水素・土素について」を参照）¹³⁾

2-3-3 人間の発達と文明の進化の交錯点：『型』論

前章での考察より、岡田の人間の発達論（魂の向上）と文明の進化論（夜昼転換）が反復説として総括することができ、現在は文明進化のために個人の発達が非常に重要な役割を果たしていると解釈することができるが判明した。ウィルバーの言うように、個の発達と集合の進化が密接に関連しており、

個人が救われ完成し、それが広がって世界が救われ完成されるのでありますから、まず個人が救われ完成しなければならないのであります。一軒の家が世界の型とすれば、一家が天国になって、救われて世界は救われるわけであります。²⁰⁾

この「一軒の家が世界の型」という表現は非常に解釈が難しい。さらに、後続の「一家が天国になって、救われて世界は救われる」との意味的関連も深く追求されなければならない。

世界というシステムは階層構造を成しており、国家、都市、地域、家族、個人という構成単位から成り立つ。国家は上位の存在である世界の部分であると同時に、低位の存在の家の全体である。同様に、家は上位の存在である国家に対しては部分であるが、低位の存在の個人に対しては全体である。このように、低位の部分に対しては全体であり、高位の全体に対しては部分であるような単位は「ホロン」と呼ばれ、ウィルバーはこのようなホロンから成る構造を「ホラーキー構造」と名付けている²¹⁾。世界と国家と家と個人から成る階層構造を円錐として図式化し横から見ると、全体としての存在である世界が最上部に位置しているのが確認できるが（図1）、この円錐を上から見ると、同心円の中央に世界が位置し、国家に含まれ、家に含まれ、さらに個人に包含されていることがわかる（図2）。つまり、全体とは実は部分の中に包含されているという、逆説的な仮説を立てることが可能である。しかし、部

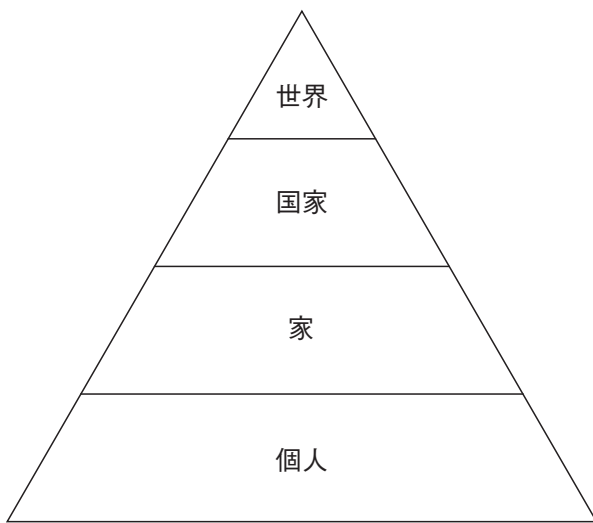


図1 世界の階層構造

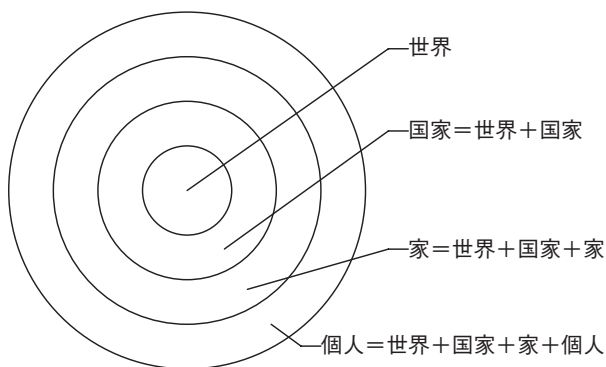


図2 世界のホラーキー構造

分は全体を把握することができるのであろうか。

岡野²²⁾は、「個人がコスモスの全体を完全に把握するということとはありえない」と述べながらも、瞑想などの直接体験によって、そういう意識体験が実際にあることを確認できる可能性を示唆している。

このようにホラーキー構造の考えから見れば、家は家だけでなく、世界と国家の情報を内包し、個人は世界と国家と家と個人の情報を内包しており、岡田の言うように「家が世界の型」であることの意味は、家の中に世界の情報が内包されている、ということである。このことが可能になるためには、家の外部の世界の情報が家の中に流れ込まなければならないが、ここで

岡田の「霊線」の考え方が非常に重要な役割を果たす。「霊線」とは人と人との間をつなぐもので、「絶えずある程度の影響、変化を人間に与えている」²³⁾一種のエネルギーと考えていいだろう。家の構成要素の個人は、それぞれ血縁家族関係にあり、父親、母親、子どもという役割を担うが、家の外では社会的な役割を担い、属する社会的組織の中でさまざまな人間と関わっている。例えば父親は、ある企業の社員であり、企業内のさまざまな部署の人間と付き合いがあり、またその企業の取引先の会社の社員とも関わりがある。母親は子どもの通う学校の保護者会で、ある役を引き受けており、週二回働いている会社では、経理の仕事をし、その会社の従業員だけでなく、会社が委託している公認会計士事務所と頻繁に連絡を取っている。子どもは学校での他の生徒と教員との関係だけでなく、放課後の塾やクラブ活動での人間関係をも築いている。

このように家の構成員は、家の外で多くの人間と関わっており、「霊線」でも結ばれている。そうして、この構成員が一堂に会する家庭はこれら「霊線」のすべてが集まる場でもある。つまり、家（全体）は、その構成員（部分）の家外でのさまざまな人間関係を可能にしている「霊線」を通して、社会と世界（全体）と密接につながっており、構成員の意識に関わらず、社会と世界の情報やエネルギーが流入し絶えずその影響を受けている、ということができるだろう。

岡田は「型」という言葉を「雛形」や「縮図」と同義に使用しており、「家が世界の型」とは、家が世界の縮図、と解釈できる。上記の引用のように、構成員は霊線を通じて社会や世界の影響を受けているわけだが、同時に家もその影響を受けてことになる。しかし、「一家が天国になって、救われて世界が救われる」とは、家が世界に影響を与えることを前提としている。そのためには、家と個人が世界の縮図であることを認識し、ホラーキー構造を意識していなければならない。個人（部分）が世界（全体）の情報を包含していることを意識するためには、まず世界（全体）のことを知り体験しなければならないが、岡田は「小乗的考えを揚棄し、大乘的考え」をもつ「世界人」になることの必要性を説いている²⁴⁾。そうして、大乘的な考え方をする「世界人」は、具体的には世界人類の

利益を大前提にする正義感を有していなければならない²⁵⁾。

以上の考察を踏まえて、岡田の人間の発達と文明の進化に関する考え方を要約すると次のようにまとめることができる。部分としての人間は、魂の向上（霊性の向上）に努力し、世界人類を主とした正義感を備えた「世界人」としての意識を強化することができれば、世界の縮図としての個人と家が、全体である世界に影響を与えることができ、文明あるいは人類の進化に貢献することができる。

2-4 岡田茂吉の先駆的思想：統合的意識拡張と人類の意識進化

第2章では、ウィルバーやグレーブスにおける人間の個体としての発達と集団（種）としての人類の進化との関連仮説がある種の反復説であり、岡田茂吉の個人の発達理論（魂の向上）と文明の進化論（夜昼転換）との関連仮説と類似していることを指摘した。ゆえに、個人の統合的意識拡張は、人類の進化との関わり合いで経験されなければならない。岡田茂吉は個の発達と全体の進化を「型」という概念でつなぎ合わせ、ミクロの変化（個体発達）とマクロの変化（系統進化）の相互作用を1940年前後に形而上的理論として確立したわけである。

アメリカの文化人類学者、精神医学者であるグレゴリー・ベイトソンは、1972年出版された『精神の生態学』²⁶⁾の中で階層的学習理論を発表している。その5段階の階層（学習0－学習IV）を以下に簡単に要約する。

- 学習0：刺激に対しての反応。
- 学習I：一般に学習とよばれている「慣れ」や「反復」や「報酬・報復」を伴うプロセス。
- 学習II：学習することを学習あるいは再学習していくプロセス。
- 学習III：脱学習。学習する集団や要素の関係に外部から異質な導入作用が入りこんできて、それが新たなシステム上の創発を生んだり、集団と要素の相互関係のパターン自体が主因となって新たな変移をおこしていく場合にお

こる学習のことで、習慣からの解放のプロセス。

- 学習IV：学習IIIに生じる変化。進化につながる学習。

一般には地球上に生きる有機体が、学習IVのレベルの変化に行き着くことは稀であるとベイトソンは言及している。しかしながら、禅のような宗教的回心や知的な直観や神の啓示などがおこりうる時の学習を学習IVに分類しており、ある種の精神的な神秘体験が必要であると述べている。そのような体験を通してのみ、さらなる高次のレベルへの発達と進化が可能になると考えているのだろう。この意味で、ベイトソンは、ダーウィン進化論と霊的進化論的な考えの統合を試みていると解釈できる。ベイトソンの階層的学習理論はその後の教育理論に影響を与えているが、彼の意図したところは教育という狭い分野での仮説の提案ではなく、人類の意識の進化という研究分野に一石を投じたのである。

このように岡田没後約20年後に、グレーブス、ウィルバー、ベイトソン等の学者が、それぞれの分野から同様の問題に取り組んでおり、個体の発達と集団の進化とがどのように関係しており、進化を促す発達のための衝動とは何であるかについての仮説は、現在に至っても実証されていないが、未だに多くの人々の興味を引いている。この仮説を立証するために、今後、岡田の「型」論を再検証し、科学との対話を図ることは大きな意味がある。

3. 大学医学部教育における霊性向上のためのカリキュラム試案

以上の統合的意識拡張の考察を踏まえて、大学医学部におけるエネルギー療法並びに岡田式浄化療法の施術力を強化するためのセミナーのカリキュラム試案を提案し、今後の研究の展望を探る。ここでは、この試案を『岡田式浄化療法の施術能力の開発：統合的意識拡張と人類の進化』と命名し、以下のように3章から成るシラバスを作成した。

第1章 複合コミュニケーションとしての岡田式浄化療法

1. 1. 自己コミュニケーション
生体エネルギー放射
社会的感化コミュニケーション
1. 2. 対人コミュニケーション
非言語ホリスティック心身コミュニケーション
1. 3. システムコミュニケーション
直接コミュニケーション

第2章 統合的意識拡張

2. 1. 自然宇宙観
2. 2. 自己意識
2. 3. 自他関係
2. 4. 人間と環境のシステム観

第3章 地球時代の治癒と意識の進化

3. 1. 岡田茂吉の進化論
3. 2. 『型』論：統合的意識拡張と人類の進化

第1章では、生体エネルギーが存在し、肉体から放射されていることを経験的に認識し、このエネルギーが、他者に及ぼす影響を「社会的感化コミュニケーション」の実例を通して学習する。さらに、このエネルギーを応用したものがエネルギー療法であり、岡田式浄化療法が「非言語ホリスティック心身コミュニケーション」として研究されていることを確認し、施術力を高めるためには、人と人との間、人と自然・宇宙間は常に「直接コミュニケーション」でつながっていることを認識する。

第2章では、岡田式浄化療法の施術力をさらに強化するためには、統合的意識拡張が必要であり、自然宇宙観、自己意識、自他関係、人間と環境のシステム観の各分野における意識を発達させることが重要であることを、岡田茂吉の論文を通して学ぶ。

第3章では、個の発達と集団の進化の関係を探求している研究の概要を学び、それらの先駆的な理論として岡田茂吉の進化論（「夜昼転換」）について理解を深め、統合的意識拡張が人類全体の意識の進化に貢献していることを学ぶ。

このシラバスは、岡田茂吉が1935年から1955年の間に「新しい医学」創設のために発表した論文を、宗教用語を極力避け、現在の科学が理解できる用語に翻訳し、しかも、「新しい医学」理論の概要が歪曲されることなく、大学用のテキストとして作成されたものである。このシラバスの特徴を以下に列挙する。

1. 浄化療法を複合コミュニケーションとして捉えることにより、施術者と非施術者の間で起きる相互行為のあらゆる面において、施術者が注意すべき点を指摘している。
2. コミュニケーション活動を拡大定義することにより、日常の対人行動すべてが、エネルギーの交換活動であることが理解できる。
3. 統合的意識拡張をウィルバーの統合理論の枠組みを使って分類することにより、人間の内面と外面における事象、また、個別あるいは集団の事象に関する意識をどのように拡張すべきかが、科学理論的に説明されている。
4. 岡田茂吉を、宗教と科学の対話を試みてきた科学者達の流れの先駆者として位置づけている。
5. 岡田式浄化療法を中心とする「新しい医学」構想が、人間を包含する世界並びに地球の癒しを目的としたものであることを理解し、日々の施術の意義を再認識する。

4. まとめ

本論文は、3か年継続研究の最終研究報告であるが、研究の動機は、筆者が所属する大学において医学部学生を対象に「岡田式浄化療法入門セミナー」を開催した際、どのようにして入門コースを修了した施術者が靈性を向上させることができるか、という疑問を出発点にしている。また、「靈性向上」を宗教的用語を使用せずに説明ができるかという問題は、同大学のシュタイナー医学の講座担当者からも常に提起されている。

この3年間、研究論文執筆のために、多くの岡田茂吉の残した論文を読む機会が与えられたが、以前に形而上的論文として読んでいた同じ論文が、自然科学、特に生物学、物理学、医学、心理学と対照比較するこ

とにより、これらの諸科学に対して新しい知見を与える可能性があることを理解することができた。さらに、岡田茂吉は選び抜かれた言葉を使用して論文を執筆したそうであるが、語句の一字一字の選択に非常に大きな意味があることをも感じる事ができた。しかしながら、彼の深遠な思想の全貌を理解したわけではないので、ここで提案したカリキュラムには、まだまだ未完成の部分があることは否定できない。今後、岡田茂吉研究者が一同に会し、個々の体験と知識を交換し発達させ、岡田茂吉研究を進化させることが緊要である。

本論文で提案されたシラバスとカリキュラムの一部は、ケン・ウィルバーの統合理論を建学の精神とした Ubiquity University のセミナーで採用されることになり²⁷⁾、2017年の冬学期よりオンラインコースとしてネット上で配信されている。また、将来はドイツとイスラエルの大学機関で試験的セミナーが開催される予定である。

謝 辞

本研究は、一般財団法人MOA健康科学センター2015年度研究助成による研究です。当センターの物質的な面だけではなく精神的な面でのご支援にも心から感謝申し上げます。また、一般社団法人MOAインターナショナルの森省三氏には、本研究に対して貴重なご意見を頂きました。

[参考文献]

- 1) ペーター・ホイザー, 的場主真. 人智医学と岡田式浄化療法における霊性向上に関するウィルバーの統合理論による比較研究: 医師および療法士の霊性向上と養成の課題. MOA 健科報. 19, 25-48. 2015
- 2) 的場主真. 複合コミュニケーションとしてのエネルギー療法. MOA 健科報. 20, 15-30. 2016
- 3) 岡田茂吉. 浄霊と幸福. (編者)『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第10巻. 熱海. 432-434. 2002
- 4) ジャン・ピアジェ. (訳者) 滝沢武久. 発生的認識論. 白水社. 東京. 1972
- 5) Smith P, Cowie H, Blades M. Understanding Children's Development. Blackwell. 193. 1998
- 6) 倉谷滋. 個体発生は進化をくりかえすのか. 岩波書店. 東京. 2005
- 7) 三木成夫. 生命形態学序説: 根原形象とメタモルフォーゼ. うぶすな書院. 東京. 1992
- 8) Graves C. The never ending quest: Clare W. Graves explores human nature. (eds) Cowan C, Todorovic N. ECLET Publishing. Santa Barbara. 2005
- 9) ケン・ウィルバー. (訳者) 松本太郎. インテグラル・スピリチュアリティ. 春秋社. 東京. 2008 (原著: Wilber K. Integral spirituality. Integral Books. Boston. London. 2008)
- 10) Beck DE, Cowan C. Spiral dynamics: Mastering values, leadership, and change. Blackwell Publishing. 1996
- 11) ジェシカ・レーミシェ. スパイラルダイナミックス: 限りなく上昇する探求. http://integraljapan.net/articles/sd_1.htm, (accessed 2017-06-15).
- 12) 岡田茂吉. 真理の具現. (編者)『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第7巻. 熱海. 269-271. 2002
- 13) 的場主真, ペーター・ホイザー. 『岡田式健康法』とドイツにおける『人智学医学』との比較研究: 理論的背景, 現状と問題点. MOA 健科報. 18, 3-28. 2014
- 14) 岡田茂吉. 霊層界. (編者)『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第6巻. 熱海. 256-259. 2002
- 15) 岡田茂吉. 霊層界. (編者)『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第5巻. 熱海. 343-346. 2002
- 16) 岡田茂吉. 怒りを克服する. (編者)『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第9巻. 熱海. 313-315. 2002
- 17) Yano J, Yu K, Donaldson G, et al. Indigenous bacteria from the gut microbiota regulate host serotonin biosynthesis. Cell. 161, 264-276. 2015
- 18) 岡田茂吉. 真文明とは何ぞや. (編者)『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第9巻. 熱海. 619-624. 2002

- 19) 岡田茂吉. 夜昼転換. (編者)『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第5巻. 熱海. 257-263. 2002
- 20) 岡田茂吉. 大光明世界の建設. (編者)『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第1巻. 熱海. 27-40. 2002
- 21) ケン・ウィルバー. (訳者) 松永太郎. 進化の構造. 春秋社. 東京. 1998
- 22) 岡野守也. 自我と無我：＜個と集団＞の成熟した関係. PHP研究所. 2000
- 23) 岡田茂吉. 霊線に就て. (編者)『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第6巻. 熱海. 87-94. 2002
- 24) 岡田茂吉. 世界人たれ. (編者)『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第9巻. 熱海. 503-505. 2002
- 25) 岡田茂吉. 正義感. (編者)『岡田茂吉全集』刊行委員会. 岡田茂吉全集 著述篇第11巻. 熱海. 680-683. 2002
- 26) Bateson G. Steps on an ecology of mind. Chandler Publishing Company. 1972
- 27) Matoba K. “Cosmopolitan communication: Foundations effective communication in a complex world.” Ubiquity courses. <http://www.ubiquity.courses/p/cosmopolitan-communication-foundations>, (accessed 2017-06-15).

Development of Healing Competence for Okada Purifying Therapy (OPT) through the Integral Transformation of Consciousness and the Conscious Evolution of Humankind

Kazuma MATOBA¹

Abstract

A healing competence for biofield medicine, including Okada Purifying Therapy (OPT), can be developed through a combination of studying related theories and hands-on practice over a concentrated period of time. The most important prerequisite, however, is the development of a spiritual competence, which is defined as the “integral transformation of consciousness.” This paper, based on Heusser & Matoba (2015) and Matoba (2016), examines how this transformation of consciousness is closely related to the concept of *kata* (or “prototype”) proposed by Mokichi Okada. This concept, one of the most important in his core philosophy, can be understood as a crossing point between an individual’s development (ontogeny) and the collective evolution of humankind (phylogeny). This paper also reveals how Okada’s concept—which originated at the beginning of the 20th century, prior to modern psychology and the theory of evolution—can contribute to the ongoing dialogue between natural science and religion. As a final report following three years of research, this paper proposes a curriculum for the spiritual development of medical students seeking to gain their healing competence.

Keywords:

spiritual development, human development, transition from night to day, *kata* (prototype)

¹Universität Witten/Herdecke Fakultät für Kulturreflexion, Alfred-Herrhausen-Str. 50, D-58452 Witten, Germany.
Corresponding author: Prof. Dr. Kazuma Matoba, Ph.D. TEL: (+49)2303-9206520, E-mail: kazuma.matoba@uni-wh.de
Received 28 July 2017; accepted 9 December 2017.